

# ワインザー暮らし 一

みずき 啓

二〇〇〇年二月、蘭丸（シーブズ犬）と大学生の息子を家に残しイギリスへ翔った。二週間の予定である。ロンドン近郊のワインザーには長期出張中の夫が首を長くして？いた。

ロシア経由の飛行機は、あろうことかモスクワ空港でいったん全員降ろされる。ソ連時代からモスクワというのは（あそこは、絶対避けられた方が無難）と深く広く囁かれている空港である。それでなくても、旧共産圏の空港は緊張してしまう。職員たちは軍隊式官僚気質を全開、丸出し。乗客を無事に送り出すうと言う気は、さらさらのさ。搭乗のバスに乗り込んでいる人達がすぐ見える鼻先でゲートを下され、マイツカと胸（厚かった！）張られたこともある。外国語には、一皿も顔を動かさない蠟人形と化す。鉄人形かも。乗客は荷物以下。荷物は、係が動かさなければ移動しないもんね。乗り損ねた乗客は、なんとか次善の策をと七転八倒、悪戦苦闘するからね。（えっ、これが、偉大なるロシアの世界に冠たるモ

スクワの空港？）野っぱらに廃屋、のイメージを頭の中で限りなく拡大したらこうなる、みたいな、ただの原野に、ぽつんと古ぼけた建屋。格納庫もなにもない。多分、幾つか在るモスクワ空港の、一番お粗末な奴なのだろうけど。ゲートで、トランクみたいに立っているごつい女性係官に、下足札みたいな板を渡された。失くせば、乗り換えアウトになる貴重な板なんだよ、これが。

ゲートから数mで左トイレ、右、小さい入る気もしないような売店。高くて頑丈そうなヒールに、短パンから伸びる、真つすぐな、見事に長い脚。ロリータに肉付けしたかのようなロシアの女の子が、あつちとこつちとそつちに何するでもなく、ただ歩いていだけ。その先は通路、そして広い階段。あ、あ、あ、ああ、椅子もベンチもないんだあ。階段に座り込んでにぎやかにしているよ。

ロンドンのヒースロー空港もかなりの年代物だった。暗くて天井が低い。預けた荷物が迷子になって、二度と会えなくなることで、世界に名を売っている空港である。去年、私の友人もヒースローで預けたスーツケースがパリまでに消えていた。空港ス

タツフよりありがたくも下賜された一時金で、下着その他を買いに走る羽目になった。私の荷物はどうと、その店では一番容量が大きかったという理由だけで選んだ、小学生も恥じらう赤い、ださいリュックで、金目の物は明らかに入っていない面構え。いつもフリーパス、さくさくとにこやかにターンテーブルに現れる。

到着ゲートの柵の向こうで、出所の妻を待ちくたびれた夫は、「遅い」と一言。トイレ行ってただけだもんね。

ヒースローの地下駐車場は、昔の横浜駅西口地下駐車場みたい。モルグ(死体置き場)っぽく湿って、黴臭い。温く澱んでいる。息をするのさえ嫌な感じ。

夫は赤いプジョーをレンタルしていた。  
空港からウインザーまでは、約三十分。

ウインザーの住居

夫のアパートは、柱だけのゲートを入ると、日本だったら確実にもう一並び建って、お釣りが来るほど幅広い通路沿いに、植込みが瑞々しい四棟。の三番目。ああ。絵本やテレビで見慣れた煉瓦のお家だ。屋根の上には壺のような曲線の、茶色い可愛い煙突

がいつばい乗かっている。

が、実は一棟が、ぜくんぶ四軒で構成されているとは知らなかったよ。真ん中にドアが二つ並んでいます。それぞれの前に家番号。一方を開けてみると、あれ、狭いエントランス。そして、一階のお宅のドアと二階への階段。のぼり切った先に、夫(会社)の借りた物件のドアが、やっと在ったよ。

ドアを開けると、いきなり、そのまんま、居間である。目の先に食卓と四脚の椅子。右は廊下。細長い居間は、膝から天井までの高い細かく仕切られた大きな窓で明るい。白い壁に接して、茶色の革張りの三人掛けのソファと電話台。その上の白い陶器のスタンド。窓際には布張りのこげ茶のオットマン付きチェアと付いてないチェア。その間に、ガラスのティーテーブル。コーナーにやはり白い足長スタンド。壁に絵。うす茶のカーテン。といった、茶と白でインテリアされた、可でなく不可でなく、まあ、こんなものでしょう。万人向きだね。

日本でもよく見る、(家にはないけど)プラスチックだか何だかよく分からない硬い蛇腹のカーテン。その先はL字型のキッチン。やはりL字型の吊戸棚。この国の人には十分届く高さだろうが、悔し

い。私には高い!

居間とキッチン之余りで出来た正方形の空間は、テーブルと二脚の椅子だけでいっぱい、小さいベランダになっていた。居間からベランダへのガラスのドアは、鍵を掛けておかなければ、だらんとしどけなく開きっぱなしの代物。どうすればこうなるのか、全部の窓が開かないか、閉まらないか、まともな奴、ゼロ。だいたい玄関?の高い、ガラスをはめ込んだご大層な木製のドアからして、ノブを握って持ち上げたり揺すったり、ご機嫌を取り結んで、やっとなガチャリ。石の家に木で建具を取りつけた宿命なのか。

居間から続く廊下の左に小さいベッドルーム、その先に主寝室。その部屋の右手いっぱいには棚が付けられ、その下の空間がクローゼット代わりになっていた。部屋の奥のドアを開けると、トイレ・洗面・シャワールーム。

この日本の常識でも小さめの、一五坪位か、二DK。家具つき、常に家中温水で暖められ、光熱費こみにしても、月三十万とはべらぼう?

Wベッドは、頼りない程ふつかふか!ではあったが、過ぎたるはおよばざる如し。片方が寝返りを打

つただけで、もう一方は上下左右の大波に見舞われる。うっかりクシヤミでもしたら、M7並みの揺れに見舞われる。いやはや、大ごと。

ある朝、目が覚めてキッチンに向うと、廊下のど真ん中に、直径二〇cmの丸い灰皿の様なミニUFOみたいな物体が着陸している。なんで、いきなりこんな物が。まあ、後で大家に報告しましょう。食事の支度を始めた。そして、フツと閃いた。火災報知器だ。天井に接着するタイプの!夜、あるいは早朝、接着力を消耗し尽した彼のあえない最期。それを看取った私達だった。

食卓の右手の壁際に、ドラム式自動洗濯乾燥機が据えられている。言っときますけど、居間に洗濯機ですよ!それが、多彩にして信じられぬ程でかい雑音を響かせる。一番の不思議は、最もガーガーと奴がなっておられる時は、(気になって覗き込むと)あら不思議、何もしておられませぬ。投入口に寄りかかり、衣類は休憩中。あのガーガーは洗濯機の悪巧みの音だと、私は思う。証拠はある。夫のバジヤマなど、よれてひしゃげて、回復不能の化け物に成り果てて、出てくる。

洗濯物は干す手間がいらぬ。

電子レンジは出力が高く（夫はジャガイモが炭になって出てきて驚いた）手早い。ガス台は四つもリングがある。なにより、六人揃いの食器類。素晴らしいその使い勝手。丸みを帯びた、厚手のシンプルな陶器。ぜんぶ、大、小、平か、浅いか、深いかでセットされている。日本の複雑な凝った器にかしずている当方としては、天国そのもの。洗い物などイッパノパツ。もつとも、料理したいが手抜き、皿数が少ないけどね。食材が揃わないです。

フライパンがこれまた優れモノ。外側は珫瑯引きみたい。内側はフッ素加工かしら。とにかく、決して焦げ付かない。フライパンの中で料理が滑っている。フッ素加工のフライパンを、毎年新品に変えていた私。だつて、使えたもんじゃなくなるんだもん。帰国後、同様のフライパンを探してデパートをまわったが、なかった。

しかし、換気扇には、参った。ほとんど、無能。

ハワイの、ここより数倍豪華なコンドミニアムでも、無能換気扇を経験したけど。連中は蒸す・煮る・オーブンに突っ込む・ちよこつと炒めるで、もうもうと煙を排出する料理なんて、この世に存在しないと考えている。マウイで焼き肉した時には煙が充滿し、

窓が煙突状態。消防署に通報がいきはしないかと、本気で心配した。何日も部屋が匂いつばなしだった。ペナルティ取られなくて、よかった。

小さいベランダに出ると、すぐ下から運動場？が晴れ晴れと広がって、気分がいい。スポーツをする人は一度も見かけなかったが、運動場は、グリーンベルトで囲まれている。牧草なのか、伸び放題の芝生なのか？深い草地、犬の散歩コースになっている。そして、レディもジェントルマンも決つて犬の○を回収しない。イギリスの犬は、躰が行き届いているという評判は、もとより耳タコだが、彼や彼女の躰が、まず先だろう。

下の運動場で一番頻繁にみかけるのは、騎乗の人や騎馬隊の御一行だった。足踏みさせたり、方向転換したり。さすが、女王陛下の城下町、ウインザー！

掃除機が、これまたウンともスンともお不動様。夫が火災報知器と掃除機を持つて、入った最初の棟に事務所を持つ、大家さんの所へ行った。